

「佐藤純子氏インタビュー」

井上靖の中国旅行

何 志勇

二〇一〇年一〇月から中国の訪問学者という形で、城西国際大学で一年間勉強することになった私は、二〇一二年三月五日と三月六日に、東京都千代田区有楽町にある日本中国文化交流協会の事務局で、協会の理事佐藤純子先生に、井上靖の中国旅行を主題に、インタビューを行った。同じ後楽寮に住んでいた中国の東北大学准教授顧寧先生が同行し、撮影の協力をしてくださった。また、協会の事務局次長戸室道子様にも同席していただいた。左は、二日間のインタビューの要約¹である。

一、日本中国文化交流協会の創立

【佐藤純子】日中文化交流協会という団体は一九五六年に創立されました。当時は日中間に国交はなく、日本政府は台湾、つまり中華民国というものを認めていたという非常に政治的には成熟していない時代です。しかし、日本の多くの文化界の人たちは、日本にとって文化の母国である中国への侵略戦争に対する認識においては、政治家と比べるとずっとその理解が深いと思います。

近代以来、日本の芥川龍之介、谷崎潤一郎など多くの文化人、中国の

田漢、夏衍、魯迅、郭沫若などは相手の国に行って、文化の相互理解に努めており、日本の侵略戦争に対して、憤りを感じていました。しかし、敗戦後、日本政府はいつまでも、中華民国というものを認めていました。そういう状況をなんとか打破し、本来の姿、つまり日本と中国との国交を正常化したいという気運が日本文化界の中に現れてきました。それで、文学界、演劇界など一流の文化界を結集して、中国と文化交流を再開するため、フランス文学者の中島健蔵が初代の会長になって、一九五六年三月に、この協会を創立しました。

二、井上靖と「私」との初対面

【佐藤純子】当時、井上靖先生は作家として、一番旺盛な創作をやっていた時期です。それと同時に、日中文化交流協会が創立された時から、この団体に加入して、熱心に日中文化交流を進めようという熱意に溢れた会員でした。



私は、一九五七年に大学を卒業し、英文学の専攻でしたが、それとは関係ないこの団体の事務局にその年の三月に勤めました。その頃、ちょうど、協会の機関誌に、井上先生が「遣唐船のこと」という文章を寄せて下さるので、私は缶詰中の井上先生のいるホテルに原稿をいただきに行きました。浴衣を着て、この辺まで袖捲りして書いている姿には本当に鬼気迫るものを感じました。それが最初のお会いした時の印象です。

その年の秋、井上靖は最初の訪中をしました。訪中する文学代表団を羽田に見送りに行った私は二回目に井上先生にお会いしました。それから、中国から作家代表団が来日し、ご自宅に巴金先生などをお招きした時に、私もお伴したり、様々なパーティでお会いしたりして、だんだん言葉をかけていただき、お話もできるようになりました。その後、四〇年近く、ずっとご指導をいただきました。ほんとうに尊敬しています。

三、第一回の中国訪問

【何 志勇】一九五七年に、井上靖先生は第二次日本文学代表団の一員として、初めて中国を訪問しました。その辺の事情を紹介していただきたいのですが。

【佐藤純子】この時は、文芸評論家の山本健吉という人が団長でした。評論家は全体を見る立場で、作家とは違った視点があります。また、山本健吉は当時、日中文化交流協会の常務理事でしたから、団長に選ばれたわけです。一方、井上靖先生はその時、一番忙しい時期です。協会に多大な協力をしてくださいましたが、時間がなかなか取れず、会員にとどまることを望まれました。

当時の訪中メンバーでは、井上靖が一番活躍しています。誰よりも一番多くの読者を持つているし、また、中国に題材を取った作品を一番書いています。

日中文化交流協会は当時、統一戦線ということを重視し、もの見方の広い人々を中国との交流の輪に参加してもらおうと努めていました。それで、中野重治、十返肇、本田秋五といった左派系の作家だけでなく、左派に理解を示していた井上靖にも参加してもらったわけです。大きな力になりました。既に「天平の薨」を書いていましたから、中国からすぐ歓迎されたんです。「天平の薨」は楼適夷という人が翻訳しました。²

四、中国敦煌芸術展

【何 志勇】一九五八年に東京で、敦煌芸術展という展覧会が行われました。その辺の事情を紹介していただけないでしょうか。

【佐藤純子】開幕は五八年の一月です。五八年の五月に長崎国旗事件が起きて、非常に、日中間が険悪な状況になったのですが、五八年一月頃は、日中関係には少し進展があり、大型の展覧会が日本で開催できるような雰囲気があったのです。視覚に訴える敦煌のものを初めて見た井上靖は大変勉強になったと後年よく言っていました。若い頃から敦煌に興味を持っていた井上靖は敦煌をより深く理解する上で役立ったと思います。

敦煌というものに憧れを持っている日本人はたくさんいます。また、日本の学者の間では、敦煌というものは非常に重い地位を占めていたのです。敦煌学という学問もあるし、考古学を研究している京都大学のグ

ループも敦煌を高く評価しています。だから、私たちの協会は、模写でもいいから、敦煌の壁画展というものができればいいと、創立した時から考えていました。展覧会の時、常書鴻という人が団長で来ました。

当時、まだ国交正常化していない時代ですが、日本橋の高島屋の八階の展覧会場は人がいっぱい、八階からずっと一階まで、人が並んでおり、大変なブームになりました。それだけ、日本の人たちは中国の文化というものに対する尊敬と憧れがあったわけです。もちろん、見に行っただ人は学者だけではなく、普通の人もいます。しかし、爆発的に敦煌というものを人々が知るようになったのは、やはり井上靖の小説です。

五、「貧乏」な協会

【何 志勇】一九六一年の二回目の訪中については、『日中文化交流』にはあまり記録されていないようです。

【佐藤純子】わたしたちの会報は紙面が少ないです。というのは、この団体は今でもそうですが、政府、特定の団体などから、まったく援助をもらっていません。会員の会費だけで運営している団体ですから、決して裕福ではないのです。だからこそ、また、政治的な主張をちゃんと自分たちで貫くことができます。

六、「壺」に見る作家の良心

【何 志勇】次は、老舎のことについてお伺いしたいと思います。井上靖は七〇年二月に『中央公論』に小説「壺」を発表しました。この

小説は文革の迫害に死をもって抗した老舎への愛惜とその人格を称えて、文革がまだ終わっていない中国への旅を考えると、書くことを躊躇させた作品であると佐藤先生が書いておられます³。文革については、井上靖先生はどうお考えだったのでしょうか。

【佐藤純子】文革に対しては、井上靖だけでなく、中島健蔵をはじめとする協会の指導者たちはみな戸惑っていました。私たちの協会の最も親しい友人が、例えば、「四条漢子」⁴と呼ばれた周揚、田漢、夏衍、陽翰笙のような中国の文化界の友人がみな打倒されました。いったい文革というのは何なのか、中国はいつたいたいどうなるのかという非常に暗い時代でした。

そんな中で、中国で批判されている老舎を哀悼するものを発表すれば、自分が二度と中国に行けなくなるほか、協会にも迷惑がかかるのではないかと井上靖が心配して、中島健蔵、白土吾夫等と相談したことがあります。結局、作家の良心を優先すべきだと考え、中国に睨まれることを覚悟しながら、老舎を哀悼する小説「壺」を発表することを決意しました。というわけで、一九七〇年に小説「壺」が発表されました。

一九七四年に、日中文化交流協会代表団が中国から招待され、日中間の一番機で文革中の中国に行くことになりました。ちょうど、武闘が終わった時期に当たり、少し穏健な時代だったので、最初、躊躇していた井上靖は中国への熱愛により、代表団に加わり、中国を訪問することになりました。幸いなことに、「壺」のことは何の話題にもなりません⁵した。

それを契機に、文化交流に熱心だった井上靖は文革がまだ終わっていないのに、翌年の七五年、その次の七六年、七七年と、毎年のように

訪中していました。既に流行作家の第一線から退いて、時間的な余裕もできたということもあります。自分が団長として、日本文壇の一流の人、例えば司馬遼太郎とか、水上勉とかを誘って、素晴らしい代表団を編成して訪中したのです。

一九七六年に四人組が倒れ、文革が収束しました。翌年の八月に、井上靖は初めて新疆ウイグル自治区を訪問しました。北京に帰った後、巴金に会いたいという要望を出してみたところ、承諾していただきました。北京から直接に東京に戻るのをやめ、上海に寄って巴金との再会を果たしました。その時、井上靖は「壺」が納められた著作『桃李記』を巴金に贈呈しました。日本に

留学したことがあり、日本語が分かる巴金はその夜に読み、翌日、空港で私たちを見送る時に、「『壺』を読んで感動した」ということを井上靖に話しました。私は井上先生からそばに呼ばれて行って、井上靖先生の喜びぶりを目にした時、作家の良心を貫き、書いてよかったという井上先生の気持ちを感じ取りました。

それから三年後、一九八〇年に巴金を団長とする中国作



家代表団が来日した時、巴金が歓迎宴会において行った挨拶は普通の儀礼的な挨拶ではなく、内容のある感動的なものでした。「私はいま非常に恥ずかしい思いで、この壇上に立っています。なぜならば、私たちは老舎の死を悼むことは出来なかった。それなのに、外国人である井上先生、開高健、それから水上勉はそれぞれ書いています。中国の文革が収束する前に、日本の作家は勇気を持って、隣国の老舎の死を悼んでいるのに、自分たち中国人は誰もそれを悼むことはできなかった。本当に私は作家として恥ずかしい」という挨拶でした。その頃、巴金は獄につながれ、書く自由がなかったことを知っている日本の作家達は、巴金の真摯な姿に、みな感動しました。

「壺」といえば、こういうことです。今でも、中国の作家は「壺」のことをよく知っていますよ。

七、映画「天平の薨」の中国ロケ

【何 志勇】一九八〇年に映画「天平の薨」が上映され、前年の一九七九年に、井上靖先生は二度も「天平の薨」の中国ロケに立ち会ったことがあります。井上靖先生は何故、映画「天平の薨」にこれほどの関心を示していたのでしょうか。

【佐藤純子】小説「天平の薨」を映画にすることはそんなに珍しいことではありません。しかし、日本が戦後初めて中国でロケーションすることは画期的なことでした。

映画の監督熊井啓も、原作者井上靖も、中国でのロケーションを熱望していました。それで、一九七七年に、日中文化交流協会は日本映

画人代表団を中国に派遣する時に、この要望を当時の中国電影家協會の指導者である司徒慧敏に提出し、承諾していただきました。それで、一九七八年から準備して、一九七九年にロケに行ったわけです。

初ロケという画期的なことですから、井上靖はわざわざ二回も中国での現地ロケに立ち合いましたが、映画の芸術的作法については、小説と映画の違いを弁えた井上靖は一切干渉しません。

今度、四月二十八日に、「わが母の記」という映画が一般公開されるそうです。既にモントリオールで映画賞を受賞しました。役所広司が主演を務め、井上靖の家でロケをやったのです。書齋も、応接間も全部、そこで撮影し、役所広司は井上靖の机をそのまま使って、幸せな人ですね。その家は、今は北海道の旭川に移築されてしまいましたから、側にあるご長男の家だけが残されています。

一九七九年は「天平の薨」の中国ロケで中国に行くと同時に、井上靖はNHK番組「シルクロード」取材班に伴って敦煌にも行きました。八〇年代初期の敦煌ブームを引き起こしたこの番組に対して、井上靖はものすごく協力しました。日中文化交流協会もNHKの相談を受けたり、ニヤ遺跡などの取材の許可を取ることに協力したりしました。敦煌のコメンテーターを井上靖にすることなども相談を受けました。⁷

八、人民大会堂における講演

【何 志勇】一九八二年に、人民大会堂で、井上靖先生が講演をなさったことについて簡単に紹介していただけないでしょうか。

【佐藤純子】一九八二年に、井上靖は日中関係の七団体の総団長とし

て、人民大会堂で行われた日中国交正常化一〇周年祝賀会で優れた講演をしました。人間同士の相互理解を強調し、それを土台にして初めて内実の伴う健全な国家関係ができると述べ、相互理解を促進するのに一番役立つのは文化、芸術であると自論を練り広げました。時間的な余裕ができた井上靖はこのような公な活動にも参加し、国際舞台において、ますます活躍するようになりました。

九、国際ペン東京大会

【何 志勇】小説「孔子」の中にある「葵丘会議」は八四年三月に「核状況下における文学」を主題とした国際ペンクラブの東京大会の講演で井上靖によって取上げられました。その辺の事情を簡単に紹介していたきたいのですが。

【佐藤純子】井上靖は「孔子」を書くために、六回に亘り、中国へ取材旅行に行きました。一九八三年の時、井上靖は『春秋左氏伝』に出てきた「葵丘会議」に興味を持ち、葵丘というところの所在を中国の河南省の社会科学院の人に問い合わせたところ、今の鄭州と開封の隣みいたいところにあることが分かりました。それで、一九八三年一月に、河南省を訪問し、葵丘というところを訪ねました。現地の情景を頭の中で膨らませ、その後、「葵丘会議」の提唱者斉の桓公と春秋時代を小説の中に書き入れたわけです。

「葵丘会議」は長い歴史の中で黄河の水という、今で言えば原爆のような大きな武器を使い、堰を切って相手国を水浸しにすることによって戦争を勝ち取るというやり方を、春秋時代の桓公という人の提唱により

取りやめにした会議です。国際ペンの主管国の会長としての井上靖は、現在の核状況下における文学というテーマのもとに、二五〇〇年前の中国のそれだけの会議を主題にした演説をして、内外の文学者から高く評価されました。

【何 志勇】その時、巴金は車椅子で東京大会に参加しましたね。

【佐藤純子】そうです。中国代表団の団長として参加されました。その演説もすばらしかったです。

ご存知のように、国際ペンは国が参加すると同時に、地域の参加もあります。当時、台湾が「中華民国」という名前で加盟しているのですが、中国はそれに抵抗して、それまではずっとペン大会に参加していませんでした。だが、国際社会における中国の影響力がだんだん高まってきて、中国ペンを国際ペンに参加させたいという気運の中で、井上靖は国際ペンと中国ペンに働きかけ、何とか、中華民国ペンを台湾ペンに変え、中国ペンを東京大会に招くことになりました。ですから、体が許す限り行くと約束した巴金は、車椅子で大会に参加しに来たわけです。井上靖は成田に迎えに行きました。私も行きました。

去年の十一月、井上靖の遺族と一緒に中国に行つて、上海で巴金のお嬢さんと会いました。巴金故居も見学しました。巴金と井上靖の友情は大変な友情ですね。

十、小説「孔子」の創作と翻訳

【何 志勇】その時、「孔子」取材も重なっていて、その取材と創作について、どう見えていますか。

【佐藤純子】「孔子」で井上靖が一番書きたいのは孔子と弟子たちの放浪の旅だと思えます。この小説を『新潮』に連載する時、井上靖は編集者と意見を交わしながら、書いており、その執筆に対する厳肅な態度に非常に感心しました。また、その時は既に発病しており、癌センチターに机を持ち込んで書いていた姿も感動的でした。井上靖の病気を知った小林先生は井上さんが生きている間に、これの中国語訳ができればと思い、鄭欽欽さんに訳してもらいました。それで、連載中、井上靖が一回連載したら、私はそれをコピーして、鄭さんに送り、やっとのことで、井上靖は自分のものが中国語に翻訳されたことを知って亡くなりました。「孔子」の中国語訳は人民日報出版社から出しました。

十一、井上靖の戦争体験

【何 志勇】二〇〇九年、井上靖の「行軍日記」が『新潮』に掲載されました。井上靖の戦争体験について、どうお考えですか。

【佐藤純子】「行軍日記」はとても意味深いものであり、発見されてよかったです。『行軍日記』には、戦争の悲惨さというものを書いています。大げさに、声を高くしては書いていないのですが、しかし、全体を読めば、軍国主義というものはいかに悲惨なものであるかということが分かり、戦意を鼓吹していないことが分かるでしょう。

井上靖は三回召集を受け、三回目だけが実際に中国に行つて、河北省に四ヶ月ぐらい滞在していました。だが、井上靖はものを運ぶ役の輜重兵ですから、中国人を殺すような立場の兵隊ではないのです。私はないと思うし、(行軍日記を指して)これは従軍中の真実の告白だと思います。

井上靖が自分の戦争の話をしたのは昭和が終わる一九八九年の一月七日のことです。たまたま、その日、私は井上家に呼ばれて、ご馳走になり、戦争のことをいろいろ聞かせていただきました。

井上靖も他のインテリと同じように、日本の侵略戦争に反対していません。しかし、徴兵忌避をしてまで戦争に反対していません。そのような人はいないわけでもありませんが、ほんのわずかで、ほとんどの人は国家の命令で無理やりに戦争に連れて行かれてしまったわけです。

昭和で青春時代からの人生を送った井上靖は、その昭和の最後の日に、侵略戦争で命を落とした兵隊たちの惨めさを語りました。天津の陸軍病院に入院している時に、自作小説の映画「流転」の主題歌でみんなに注目された井上靖は兵隊たちのために手紙の代筆をやっており、戦争のことには少しも触れず、もっぱら家族のことを心配している兵隊を眼にしていました。

井上靖は昭和が終わる前に、戦争や昭和に触れた詩をたくさん書きました。「椿」では、椿は散る時に花びらがばらばらと散るのではなく、バサッと、まさに首が切られるという凄まじさと同じように、花そのものが落ちる。椿は昭和の暗い時代の花だと言っています。戦争と平和を共に持った昭和時代もどちらかと言えば、戦争が色濃く現れた時代だったという井上靖の戦争観が現れていると思います。また、「落日」では、従軍中に中国の男女と一緒にになって、渡り鳥を見たり、落日を見たりして、幸せを感じている井上靖の「無防備」という、好戦的な態度が微塵もない、クールな傍観者の視点が見られ、戦争に反対する心が溢れていると思うのです。井上靖は戦争についての小説が非常に少ないと言われていますが、確かに表面だったものはそんなに多くないのです

が、こういう詩の中に、やはり、井上靖の戦争に対する考えというものが非常に現れていると思います。

十二、紳士か無頼か

【佐藤純子】私は井上靖という人間を非常に尊敬している者です。長期にわたって、取材のための、時には過酷な旅のお伴をしており、そんなところから本当の人間性が分かったからです。

日本の文壇では、井上靖は文壇の紳士だと言われていますが、しかし、それだけではないのです。いわゆる無頼と言って、必要であれば、暴力を振るっても、自分の信念を通すというような短気な一面を持っている人です。逆説的に言えば、これも井上靖という男性としての魅力であると言え、「紳士」だけだったら、何も魅力がありません。例えば、北京で、駐在の日本の新聞社の新聞記者と私たちの協会の当時の専務理事白土が、団長の井上靖の部屋で喧嘩になったことがあります。井上靖はさんざんけんかさせておいた後、仲裁に入り、さすが柔道出身だけあって、力強く二人の腕を押さえつけました。それだけの激しさ、一種の無頼性を持った人です。

一方、身分の上下で人を差別することは絶対でない人でもあります。家のお手伝いさんに対しても、丁寧な呼び方で呼んでおり、夜遅く帰宅する時に、必ず自分の乗ってきたハイヤーに乗せて帰らせます。無頼でもあり、やさしい人間でもあります。このような井上靖が協会の会長に就任して、どれだけ協会の発展に寄与したか分かりません。ですから、あらゆる意味で、私は井上靖先生を尊敬しています。

十三、胡耀邦との会見

【何 志勇】大連には井上靖先生は一度行ったことがあります。憧れの楼蘭にはとうとう行けなかったのですね。

【佐藤純子】井上靖は大連以外、あまり中国の東北に行っていない。チベット訪問もあまり望みませんでした。もっぱら西の方へ行っただけですが、残念なことにとずっと憧れていた楼蘭にはとうとう行けなかったのです。

楼蘭に行く話は八四年に胡耀邦総書記と会見した時に決まったのです。胡耀邦総書記は外交家の資質があり、会見の席などでも、いつも相手の立場に立って、親しみのある対話型の中国の指導者で、私たちはみんな好感を持ちました。そのような胡耀邦総書記は井上靖と会談の後、要望を求めました。その時、井上靖が出したのは楼蘭への旅と黄河文明展の開催でした。胡耀邦総書記は即座に承諾してくれました。その時に要望を出した井上靖も、直ちに受け入れてくれた胡耀邦総書記も、その話しぶりや立ち居振舞いが印象的で、懐かしいです。その夜はみんな大喜びしました。

楼蘭はもうあした出発というところでだめになりましたが、黄河文明展はその後二年間の準備期間を置いて実現し大成功しました。

十四、井上靖文学を読む

【何 志勇】井上靖の歴史小説の中で特に好きな作品はどれでしょうか。

【佐藤純子】私は「狼災記」が大好きです。「狼災記」について、井上靖先生に質問したことがあります。どういふものを題材にして書かれたんですかって聞きましたら、『漢書』に「その時狼が出た」というただ一つの言葉にひらめいて小説を書いたと。「異域の人」という小説もいいですね。班超という人を書いて、舞台は今のカシユガルです。作品では疏勒というところに何十年もいた班超を描いています。つまり西域の中でもっとも西のカシユガルです。最後に漢の部隊が祖国に帰ってきた時、洛陽の人たちはみんな、自分を指して「胡人だ」と言ったというところは感動的で、そういう結末はいいなと思います。その呼ばれ方の中に班超の生き様がはっきりと見えてきましたね。

十五、柔道出身者の耳

【佐藤純子】井上靖は金沢で高校時代を過ごしました。その時から文学に目覚め、また柔道も一番やった時期ですね。四高の柔道部のキャプテンを務めていました。体が小さいので、寝技を磨ききった結果、耳は一種の畸形になってしまいました。柔道が強かったことが非常に自慢でした。

十六、井上靖とふみ夫人

【佐藤純子】井上靖夫人は、井上靖よりも三つ歳下ですが、少し足が悪く、髪も染めず、小柄で、井上靖より老けて見えますが、質素で美しい人です。井上靖は、来世がもしあるならば、どういふ人と結婚しよう

かと考える時に、まず君に声を掛けるよって言っていました。声を掛けるだけですか。ふみ夫人がいつも言っていましたけどね（笑う）。ふみ夫人にはたくさん、歌集があるんですよ。その中に、自分は足が悪いのに、井上靖が結婚を申し込んだというほのほのとした歌があります。本当に仲のいい御夫婦でしたよ。

十七、一番印象深い旅

【何 志勇】最後ですが、一番印象深い旅行は何回目ですか。

【佐藤純子】みんな、印象深いですね。しかし、井上先生が病気をして非常に心配したのは懐かしい思い出です。七九年に、カシユガルで病気になりました。

【何 志勇】その旅行で、みんな病気になって、佐藤先生だけは大丈夫でしたね。

【佐藤純子】女性は強いですね。（笑う）



あとがきに代えて…佐藤純子先生との出会い

私と佐藤純子先生との出会いは、静岡県長泉町のクレマチスの丘にある井上靖文学館の見学がそのきっかけである。当時、文学館では、井上靖の西域自写展が行われており、日本に来て二ヶ月足らずであるが、井上靖研究を急いでいた私は、自分の誕生日の日を選んで、半ば観光旅行の気分、普通列車とシャトルバスに乗り継ぎ、四時間ほどかかり、見学に行ってきた。二ヶ月後の二月一日、友人と一緒に、富士山旅行に行く時、再び井上靖文学館に寄ってみて、その前に読んで『伝書鳩』（第九号）に掲載された「井上靖先生の中国への旅」という文章の執筆者佐藤純子先生のことについて、既に知り合いである館員の徳山加陽様に問い合わせ、連絡の取次ぎを頼んでみた。その後、間もなくして、二月二三日のことだと記憶しているが、徳山様から日中文化交流協会の電話番号を教えてください、連絡してみたら、佐藤純子先生の自宅の電話に直接お願いするようにとの指示を受けた。早速、電話でインタビュアの申し込みをしてみたら、先生は快く承諾してください、その上、会見の場所と時間も直ちに決めて下さった。これほど順調に、佐藤先生に連絡できるとは思ってもなかった。佐藤純子先生との電話で知ったことであるが、徳山様から私の頼みを取り次がれた松本館長より佐藤純子先生に連絡して下さいということである。

三月五日に、有楽町の有楽町ビルディング四階にある日中文化交流協会の事務局で、私は初めて佐藤純子先生にお会いした。白髪で、既に七七歳になられた先生であるが、その淑やかで上品な姿は会報『日中文

文化交流』で見た若い頃の先生の写真とそっくりであることに感心した。先生は、この前、私が送ったインタビューの質問項目を手にして、思い出を辿りながら、懐かしそうに話してください、時々、その話し振りの中には、中日友好への情熱と、井上靖先生に対する尊敬の念や愛情が感じられ、目の前にいる佐藤先生が急に大きく見えるようになったこともある。また、先生は記憶力に優れており、何十年前のことであるが、何月何日、いつ、どこで、誰となどといった細かいところまで、はつきりと覚えていらつしやる。時々、念のため、会報の日誌と照らし合わせたのが、必ず先生の話された通りであるその優れた記憶力には頭を下げなければならぬ。話が弾み、インタビューは午後二時半から五時まで続いたが、五時の先約にはっと気付いた佐藤先生は、続きを翌日に約束してください、急いで出かけて行かれた。その日、外はばらばらと雨が降っていた。

翌日、再び事務局に赴き、更に三時間ほどお話を伺わせていただいた。前日が初対面の一介の中国人留学生でしかない私に対して、先生は何も隠すことなく、自分の思いついたままのことを率直に、時には情熱的に話してください、そこには、日中交流の中で終始正しいことをやってきたという自信と、先生の使われた言葉で言えば「自負」が感じられた。こちらもおのずと、厳粛になり、姿勢を正し、井上靖先生だけでなく、佐藤先生及び日中文化交流協会という団体に対する尊敬の念に捉われていた。インタビューの最後に、井上靖のご長男井上修一先生にお目に掛かりたいという希望を出してみたら、佐藤先生はすぐ、事務局の電話で修一先生に連絡して下さった。有名作家の遺族に会うなど普通は考えられないことであるが、佐藤先生のおかげで、あつという間に決着が

付いた。感激、驚き、幸福感の入り混じった気持ちで胸いっぱいであった。

インタビューの途中に、佐藤純子先生から、協会創立五〇周年記念号、井上靖会長追悼特集号、鄭民欽訳『孔子』、高原文庫井上靖生誕百年記念号といった入手しにくい資料を頂いた。また、事務局次長の戸室道子様のお世話で、会報に収めてある井上靖の中国旅行に関係するすべての記事をコピーし、送っていただいた。これらの貴重な資料に基づき、私の井上靖研究も今までにない展開を見せ、井上靖研究会の機関誌『井上靖研究』に「『孔子』における観察の旅と観照の旅―渡り鳥をめぐる」という論文を発表したり、八月二〇日に蘭州大学で行われた井上靖をテーマにした学術大会で「井上靖中国旅行年譜の作成について」を口頭発表したりして、実り豊かな成果を収めることができた。特に感慨深いのは、前者の論文に、佐藤純子先生が往年、井上靖先生に伴って山東省の曲阜に行かれた時に、泗水の畔に座り、構想を練っている井上靖を撮った写真を、一つの重要な論拠として掲載できたことである。長年、井上靖先生の中国旅行に同行、旅行者としての井上靖にもっとも精通されていた佐藤先生であればこそ撮れた写真であり、その中から得られる井上靖文学への理解は一通りのものではあるまい。

蘭州学会などの学術会議に参加するため、一時帰国してきてからの一〇月三日に、私は三度目に、佐藤純子先生にお会いした。事務局で蘭州学会の状況及び自分の発表を報告した後、先生に誘われて、先生にとって若い頃から行き付けの和食店で夕食をご馳走して頂いた。領土問題で中日関係がぎくしゃくしている最中であるが、それまでと変わらぬ真心を込めた人間同士の付き合い方で接して下さった。容易ならぬ中日

国交正常化の歴史を振り返りつつ、客観的、冷靜的な姿勢で当面の難局を打開してほしいという願いを漏らされ、その思いには切なるものが窺えた。偶然かもしれないが、その日も小雨が降っていた。帰りに、佐藤先生に案内していただき、昔の通勤路であった丸の内通り、仲通りを通って、復元されたばかりの東京駅まで、一緒に雨の中を一緒に歩いた。その日の雨は暖かく、街の景色は美しかった。

十月一日に、また、いつか佐藤先生にお会いできることを期待しながら、帰国の途に付いた。帰ってから、既に掲載のご承諾を頂いたインタビューの内容を整理したり、註を付したりする作業に取り掛かった。文字起こしを行ったインタビューの内容を読み直して、佐藤純子先生の表情やお声を頭の中に蘇らせつつ、懐かしくなると同時に、徳山様、松本館長、戸室次長、顧寧先生など、この幸せな出会いに協力してくださった人々に対しても、ただただ、感謝するばかりである。

註

- 1 説明の部分や重複した部分などを省き、言いたい主な旨をやや改まった表現在に仕上げたものである。尚、要約の内容は既に本人のご了承を得た。
- 2 一九六三年に作家出版社から楼適夷の翻訳が出版され、また、一九八〇年に人民文学出版社から「天平の薨」の一九七七年の改版による翻訳が出版された。両方も楼適夷の翻訳であるが、ここでは、一九六三年の翻訳を指す。
- 3 佐藤純子氏の書かれた「井上靖先生の中国への旅」に出た言葉である。『伝書鳩』（第九号）一四頁を参照。
- 4 中国語で、「四人の男」という意味である。
- 5 水上勉は『水上勉全集第十卷』（中央公論社、一九七六年）に収録された「こおろぎの壺」という作品で、老舎の死を悼んでいる。開高健は「玉碎ける」という作品の中で老舎の死を悼んでいる。この作品は一九七八年三月に『文

芸春秋』に発表し、翌年、開高健はこの作品で川端康成文学賞を受賞した。ほかに、有吉佐和子著『有吉佐和子の中国レポート』（新潮社、一九七九年三月）においても、老舎の死に触れた。

6 二〇一二年四月二十八日のことを指す。

7 二〇一二年一〇月一六日に当時の番組班ディレクターであり、現在はWOWOW社の取締役代表社長である和崎信哉氏に対するインタビューの中でも日中文化交流協会の協力に触れた。

8 「孔子」の編集者は新潮社出版部の岩波剛氏である。井上靖に伴って河南省の負函に行ったことがあり、井上靖が亡くなった後、『日中文化交流』（井上靖会長追悼特集、一九九二年五月）に「負函に立つ」という文章を寄せた。

9 最初に山東省の『柳泉』に翻訳を連載して、一九九〇年四月に、人民日報出版社から単行本が出された。

（か）しゅう・大連外国語大学日本語学院講師 本学人文科学研究科博士後期課程

